

# 二条城の造営

<http://www.kyoto-arc.or.jp>  
(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



本丸の調査 (北から) 本丸御殿遠待の礎石列。



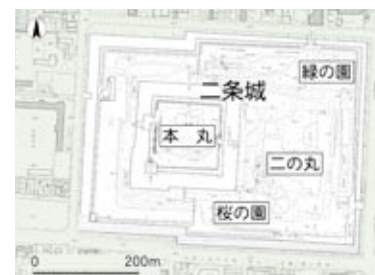
緑の園の調査 (南から) 北大手門の南側で路面が見つかった。

はじめに 京都を代表する観光地の一つである二条城は、1994年に世界文化遺産に登録され、連日、観光客でにぎわっています。この貴重な史跡を守るための防災・防犯設備工事に先立つ遺跡の調査が、2009年度から城内各所ですすめられています。今回はその成果からわかってきた二条城の造営のようすを紹介しましょう。

江戸時代前期の二条城 二条城は徳川家康により慶長7年(1602)から造営が開始され、翌年に完成しました。この時の二条城の堀は

一重の方形で、城内北西部に天守が聳えていました。現在、外堀が折れ曲がっている部分は慶長期の西堀のなごりです。その後、後水尾天皇の行幸に備えて、徳川秀忠・家光により寛永元年(1624)から大規模な増改築が行なわれます。城域を西側へ約1.5倍に拡張、新たに本丸の堀と石垣の構築、天皇たちが滞在する行幸御殿や秀忠の宿所となる本丸御殿の新築、二の丸御殿・庭園の改修などの工事が行なわれ、現在の二条城の姿はこの時にできあがりました。

本丸の調査 3m以上の高さに土を盛り上げて、本丸を築造していることがわかりました。堀の掘削により出た土砂を本丸中心に向けて積み上げ、盛土上面は比較的きめの細かい土で整地しています。現在の本丸御殿は明治時代に京都



二条城の調査位置



二の丸の調査 (南東から)  
暗渠の木樋。白く見える部分が粘土。



こんな所も… (南東から)  
東大手門内側・世界遺産の案内板前の調査区。

御苑から移築されたものですが、調査では天明の大火(1788)で焼失した寛永期の本丸御殿の礎石列が見つかりました。中には1m近い大きさの石材があり、火災の熱で表面が焦げたものもあります。本丸御殿を描いた絵図と重ね合わせたところ、礎石列は遠待や台所の一部であることが判明しました。

二の丸の調査 慶長期の確実な遺構には、現在の遠待北東側で見つかった大型の竈があり、当時はここに台所があった可能性があります。慶長期の遺構の上には寛永期の分厚い整地が行なわれていま

延びる暗渠が見つかりました。板を箱形に組んで鉄釘で留めた木樋を据え、周囲や上部を粘土で覆って密封しています。西に向けてわずかに傾斜しており、二の丸庭園への導水施設と考えています。

緑の園の調査 北大手門から延びる城内通路で慶長期・寛永期の路面が見つかりました。上面は石や砂を敷いて表面を強く叩き締めて舗装しています。これにより北大手門が慶長期より一貫して同じ位置にあることが証明できました。

桜の園の調査 桜の園周辺は行幸御殿があったと推定されている場所です。行幸御殿は後水尾天皇・

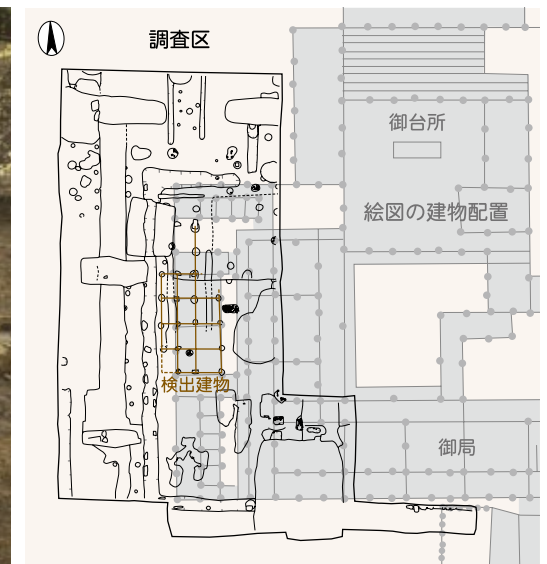
中宮和子・実母の中和門院の御殿を中核にして、付属する御台所・御局・御車屋などの施設により構成されていました。調査では御殿西端の台所に付属する部分の礎石や柱穴列、周囲を囲む溝などが見つかり、礎石や柱穴列から復元した建物の配置は御殿を描いた絵図と見事に一致しました。行幸御殿の実在が確かめられたのは大きな成果です。

おわりに 遺跡としての二条城には、まだまだ謎が残されています。観光客が歩く足下にも、貴重な遺産が埋もれているのです。

(山本雅和)



桜の園の調査 (北西から) 写真奥に建物の礎石を見ることができる。



寛永期の絵図に検出遺構を重ねたもの